平成22年度GP「学士力向上プロジェクト」

学士力向上のために～生活科ルーブリック解説～

木村吉彦

学士力向上のために、上越教育大学スタンダードに基づいて、松井千鶴子准教授と木村は、下記のようにルーブリックを作成した。他教科と教科特性が若干違う生活科にあって（例えば、学問的背景を持たない)、これらの到達目標はどのような意味を持つのであろうか。ここでは、これらの内容の解説を行い、意味付ける。

生活科ルーブリック（生活科指導法・教職実践演習用）

事項	【上越教育大学スタンダード】 教員として求められる教科等の指導力に関する事項	生活科指導法・教職実践演習ルーブリック		
		First Stage	Second Stage	Third Stage
到達目標	１．教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項（教科等の知識や技能など）を身に付けている。	学習指導要領で示されている九つの内容や生活科教科書の内容を理解し、基本的な学習指導案が作成できる。	九つの内容を構成する具体的な学習活動や学習対象と教科書の内容を理解し、体験を通して気付きを得ることを重視した学習指導案が作成できる。	九つの内容を構成する学習活動や学習対象を多面的・総合的に理解し、気付きの質を高めることを重視した学習指導案が作成できる。
	２．板書、話し方、表現など授業を行う上での基本的な表現力を身に付けている。	子どもの思いや願い、気付きを引き出す板書や話し方等を身に付けている。	子どもの思いや願い、気付きを引き出し、自覚された気付き、関連付けられた気付きへと高める板書や話し方等を身に付けている。	子どもの気付きを質的に高め、子どもが主体的に活動できる授業を実施できる。
	３．子どもの反応や学習の定着状況に応じて、学習形態を工夫することができる。	子どもの関心・意欲や学習の状況を把握するとともに、反応を的確に予測して学習指導計画が立案できる。	学習過程における子どもの関心・意欲・態度、思考や表現、気付き等を把握し、学習指導計画が立案できる。	学習過程における子どもの実態等を把握するとともに、自己評価、家庭や地域の人からの情報などを多面的に収集し、一人一人の学習の状況に即した指導ができる。
	４．全体計画及び年間指導計画の作成に当たっては、学校における全教育活動との関連の下に、教育活動を創造し、展開するための基本的事項を身に付けている。	各単元の実施時期を四季の変化の中で捉え、１年間の単元の配列と各単元の学習内容を理解している。	植物や野菜の栽培計画、動物の飼育計画等、季節の変化を見通して、その準備の時期や期間等を想定して２年間を見通した年間指導計画が立案できる。	他教科との合科的な指導や第３学年以降の社会科や理科へのつながりを考え、スタートカリキュラムを含めた年間指導計画が立案できる。

＜解説＞
　生活科の場合、教科書中心の授業展開は、教科本来の趣旨に反している。逆に言えば、教科書に書いてある内容について教師は、既に十分理解をした上で、子どもの興味・関心や実態に応じた対応が求められている。従って、学習指導の基本事項（知識･技能等）や基本的表現力（話し方・板書の仕方等）を踏まえたのちに、その次の段階の力量を発揮しなければならない。しかし、それぞれの項目の各ステージに応じた力量は求められる。以下にその内容を説明しよう。

１．教科書基本事項の理解
　ファーストステージの到達目標学習は、初等教育実習前の基本的な知識理解を意味している。確かに、教科書準拠の学習方法ではないにしても、生活科という「教科」において取り上げられるべき内容は、『小学校学習指導要領解説　生活編』に詳しく載っている。それについての理解を前提にして実習に臨むことが求められる。
　セカンドステージは、実習体験を経て、子どもの具体的な姿を思い浮かべ、同時に自身の考える活動でのねらいや「育てたい子ども像」をもとに指導案作成ができるようになってほしい。
　サードステージでは、今改訂の主たる課題の一つである「気付きの質を高める」を意識した学習指導や指導計画作成が求められるが、このレベルは、実際に現場経験を積み上げることで実現が可能になると思われる。この場合、教職大学院に在籍し、学校教育現場に継続的に参画することで、多様な子どもの見取り方や子どもの活動の予測が可能になるからである。学部４年間による経験のみのでは、第 2 ステージまでを目指すことでいいと考える。

２．授業実践のための基本的表現力
　この場合のファーストステージは、やはり、生活科に限らず「子どもの思いや願いを引き出せるような」板書の仕方や発問の仕方（話し方）のことであり、学部３年生の前期のうちに身に付けなくてはならない。あえて、生活科らしさを言えば、子どもが「あれ？」「あ、そうか」「どうして？」などと、様々な対象に疑問や知的好奇心、興味・関心を引き出せるような話し方を身に付けた上で実習に臨んでほしい。
　セカンドステージでは、より高度な生活科らしさである「気付き」を促すための表現力が問われている。ファーストステージの単なる驚きや疑問にとどまらない子どもたちの思いを引き出す力である。「こうすれば、こうなるんだ」「昨日はこうだったけど、今日はそれと違う」などと、自らの発見を言葉にすることで、次の活動へとつながるように子どもと共に活動したり、一緒に考えたりしながら学習活動を進めることで可能になると思われる。各自の気付きを場合によっては板書したり、全員の前で発表させたりすることで「気付き」を共有し、クラス全体の気付きの質が高まるのである。これも、実際に低学年実習を担当し、直接生活科を体験することで実感を持って理解できると思われる。
　サードステージは、セカンドステージの延長線上にあると思われるが、子どもが自ら動き出したくなるような学習環境を設定した上で（木村はこれを「間接教育」と呼んでいる)、子どもが自分落ちからで様々な「気付き」を自覚・意識し、活動を充実させた上で、さらに次の活動に携わりたくなるような意欲を引き出す教師の表現力である。このようなハイレベルの表現力も、教職大学院に在籍し学校教育現場に継続的に参画することで、付けることが可能になる力量かと思われる。

３．学習形態の工夫

「子どもの反応や学習の定着状況に応じて」と上越教育大学スタンダードには書いてあるが、生活科では、教師が提案した学習の大枠（例：動物飼育、野菜栽培）に対して、子どもたちが自分の課題を発見し、自分の力で解決しようとしているかをよく見取ることが大切である。例えば、野菜栽培の場合、自分で育てたい野菜を決め、その種や苗を自分で選び購入することを活動の一つとすることで、児童は自分の野菜への愛着を確実に強めることができる。それによって、子どもは自らの力で野菜栽培に取り組み、日々の栽培を楽しみつつ、野菜の生長を見守りながら、毎日が充実感にあふれる。そして、収穫にまでたどり着くと、自宅へ野菜を持って帰り、家族からのそのおいしさをほめられることで、ますます「自己実現体験」が増える。

このように、生活科では、学習の大枠は教師が決めるが、具体的な学習の内容は子どもに自己選択・自己決定を行わせる。そのための教師の学習形態の工夫とは、「子どもが自ら動き出したくなるような学習環境の設定と工夫」を意味するのである。

ファーストステージの「子どもの関心、意欲の把握」と「反応の予測」であるが、これは、本学の場合、本格実習前の１週間にわたる観察実習で自分の担当クラスの子どもたちの実態を把握することにかかってくる。真剣に子どもの姿を観察し、その実態のみならず子どもの「思い」を推測できるような力を身に付けた上で実習に臨んでほしい。

セカンドステージの力量は、実際に実習体験を経なければ身に付かないであろう。生活科ならではの「子ども主導」の学習計画の作成だからである。そこでは、様々な子どもの姿を知ることで、徐々に子どものもつ思いや願いを予測する力が付いてくると思われる。そのときの子どもの見取り（把握・評価）の観点が、今回の学習指導要領にも書かれている「関心・意欲・態度」「思考・表現」「気付き」の３観点なのである。低学年担当の実習生は、この３観点を常に念頭に置きながら子どもを観察してほしい。

サードステージでの力量は、やはり学部４年間のみでは形成が難しいと思われる。単なる教室内の子どもの姿だけではなく、家庭や地域との連携も視野に入れた子ども理解に基づく学習の工夫だからである。これも、学校支援プロジェクトに参画することで力量形成が期待できる内容である。

４．計画作成に当たっての全教育活動との関連

「充実した体験をしたあとの子どもは書きたくなる」、これが生活科の体験・活動と子どもの文章表現力（国語力、といってもよい）の基本的な関係である。１年生の時から「活動したら書く」ことを当たり前のこととして生活科学習を進めれば、作文活動は子どもたちの学習習慣として定着が見込める。実際に、思い切り体を動かしたあと（例えば、ヤギと思い切り走ったあと）、教室で作文を書くその姿は集中力がみなぎっている。大好きなヤギさんとの活動を子どもは書きたくてしょうがないのである。

また、自分の行った活動や体験を作文に書きたくて、子どもたちが字を覚えるということも生活科と国語学習との大きな関連である（ある小学校では「あいうえお順ではない文字指導」と名付けている。）。子どもたちは書きたいから字を覚えることになり、これはとても身に付く学習の方法である。「書きたいから」「～～したいから」、そのために勉強するというのは、「何のために勉強するの？」という多くの者が抱く疑問への答えとなっている。

逆に、作文を書きたがらなかったり、書けない子どもがたくさんいるということは、「書きたくなる」体験を提供できなかった教師の責任である、と考えざるを得ない。生活科においては、作文が、評価の中心であり、教師の教育活動のよしあしを測るバロメーターともなっている。

以上のように、国語との関連を例として挙げたが、低学年教育では、生活科を学級経営の中心にして、国語や図工、音楽などの教科や行事に関連させている学校も上越地域では数多く存在する。これは、生活科の可能性の大きさを実践的に示してくれていると思う。「活動は生活科で、表現方法は他教科で」ということである。命を扱う点で道徳とも十分に関連させることができる。また、数え方や表やグラフにして表現する活動を考えれば、算数の出番も必ず作れる。

自由な表現方法が可能な大きな理由の一つに、生活科では唯一絶対の正しい答えというものはまず考えられないことがある。生活科は「間違う」心配がない。生活科は、子どもの自己表現力を高めるのにもってこいの教科だと言える。

また、自由な意見交換の場を設定できることは、学級経営上も重要な役割を果たしている。これまでとこれからの活動の在り方を巡って自由に話し合えるには、担任教師と子どもたちとの信頼関係、子ども同士の信頼関係が不可欠である。この先生には何を言っても許される、クラスの友達の前では自分の思ったとおりのことを話してもいいんだ、という安心感が子どもの中にあって初めて、活発な学級活動や話し合い活動が実現できる。このように、多くの実践例から、生活科は低学年における他教科・領域等すべての分野と関連させた学習が可能であることがわかる。やはり、生活科の学力は「全人的なもの」であることを確信する。

これらを踏まえて、本項目の各ステージについて説明しよう。

ファーストステージで求められる力量は、生活科学習の９内容をきちんと把握した上で、それらの配列を季節の変化や学校行事・地域行事との関連を踏まえて年間計画に配当できるようになることである。これは、実習以前の机上学習でも可能であると思われる。

次のセカンドステージは、実際に学校現場に入り、低学年の子どもたちの姿を実際に観察し見取る（理解する）ことで可能になると思われる。現実の教育実習は２学年に渡ることは小規模校以外には考えられない。しかし、低学年を担当し、時として他学年のクラスにも入り、子どもたちの様子をよく観ることで２学年分の指導計画は可能であると思われる。なぜなら、生活科の教科書は１年・２年ではなく、「上巻・下巻」となっており、２年間をかけて様々な体験や活動に取り組めるように書かれているからである。実習での実体験と教科書の記述内容を参考にすれば、ファーストステージで身に付けた季節と子どもとの関係を基軸にして２年間の指導計画を書き出せるようになってほしい。

サードステージで求められる力は、やはりハイレベルな力量である。上に書いた低学年教科・領域のみならず、３年生以降の理科・社会との関係、また幼児教育との連携・接続を意識したスタートカリキュラムの作成は、今現在の日本の小学校教育の大きな課題である。まだまだ普及・浸透には時間もかかるが、このような国家レベルの課題に対する対応も心がけてもらいたい。まさに、学校支援プロジェクトに関与し、自分の課題として実践研究に取り組めば形成できるという、高度な力量である。

＜おわりに＞

これまでのルーブリックを元に、さらに期待される具体的な学生像についても作成した。今回は、次ページに一覧表の紹介にとどめるが、各単元ごとに期待できる学生の姿を想定して、生活科のあるべき姿を理解していただきたい。

生活科の授業で行う上で必要な生活科の知識・理解・技能等

<table>
<tr><td>主要単元</td><td>学校単元</td><td>地域単元</td><td>家庭単元</td><td>成長単元</td></tr>
<tr><td>主な学習対象</td><td>学校の施設、学校で働く人、友達、通学路、動物、植物</td><td>地域で生活したり働いたりしている人、公共物、公共施設、地域の行事・出来事、身近にある物</td><td>家族、家庭</td><td>自分のこと（自分自身の成長）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">期待される学生の姿</td><td>・学校内の施設の特徴や役割、そこで働く人の役割を説明できる。
・通学路の特徴やその安全を守っている人々の役割を説明できる。
・低学年の子どもや学校での飼育に適した動物の種類と飼育方法を説明できる。
・学校の公共性という視点から、みんなが守るべききまりやマナーとその大切さについて説明できる。
・低学年の子どもや学校での栽培に適した植物や野菜の種類と栽培方法を説明できる。
・学校で栽培した野菜などを利用して調理できる料理や調理方法を説明できる。</td><td>・低学年の子どもにとって身近な公共物や公共施設とそれを支えている人の役割を説明できる。
・公共交通機関や公共施設を利用するためのルールやマナー、安全管理の点からの留意事項を説明できる。
・野原での花摘みや虫取りなどの低学年の子どもにとって身近な自然、季節や地域の行事を説明できる。
・四季の変化を実感するのにふさわしい自然や四季の変化に応じた暮らし方を説明できる。</td><td rowspan="2">・家庭内の仕事の内容、家庭生活を支えている家族の役割や団らんの大切さを説明できる。
・低学年の子どもができるお手伝いの種類や方法を具体例を挙げて説明できる。
・あいさつや言葉遣い、身の回りの整理整頓、食事や睡眠などに関する習慣や技能とその大切さを説明できる。
・家族構成や家庭生活の状況が多様であることから、家庭単元を指導する上での留意事項を説明できる。</td><td rowspan="2">・成長を振り返る視点と手掛かりとなるものを、具体例を挙げて説明できる。
・子どもが内面的な成長に気付くための活動や手だてを、具体例を挙げて説明できる。
・子ども自身の誕生や生育にかかわる事項を扱ったり、家族へのインタビューを行ったりすることから、成長単元を指導する上での留意事項を説明できる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">・身近な自然を利用したり、身近にあるものを使ったりしてできる遊びやおもちゃの作り方を説明できる。</td></tr>
<tr><td colspan="4">・子どもが伝えたいことを伝えるための方法や手段、また他者の思いを受け止め対応するための方法や手段を、具体例を挙げて説明できる。</td></tr>
</table>